

(ヒアリング報告)

主体的に学び、学び続ける活力を得られる学習場  
—『ラーニングコモンズ』の構築に向けたヒアリング調査報告—

中沢 正江・児玉 英明・池田 恵子・小倉 都子  
篠崎 大司・今井美裕子・藤原めぐみ

高等教育フォーラム 第3号抜刷 平成25年3月

## 主体的に学び、学び続ける活力を得られる学習場

### 『ラーニングコモンズ』の構築に向けたヒアリング調査報告<sup>†</sup>

中沢 正江\*・児玉 英明\*・池田 恵子\*\*・小倉 都子\*\*\*・篠崎 大司\*\*\*・今井美裕子\*\*・藤原めぐみ\*

京都産業大学学長室\*

京都産業大学図書館\*\*

京都産業大学管財部\*\*\*

所謂ラーニングコモンズの話は、文脈が混在しており、部局横断で議論をする際などに、しばしば混乱が見られる。このため、本調査では、実際の「ラーニングコモンズ」と呼ばれる、あるいはそれに類すると思われる、学習者が学習を、より快適に行えるよう設計された場(学習場)を訪問し、文献調査と合わせて「所謂ラーニングコモンズ」に関わる論点を整理した。さらに、見学先の大学関係者にヒアリングを行い、それぞれのコモンズの特徴を明らかにした。これらを通じ、「所謂ラーニングコモンズ」の構築において後発となる「本学にとって価値のある学習場」をどのように構築しようのかを探った。

キーワード: 学習場、ラーニングコモンズ、アクティブラーニング、コミュニケーションスペース

#### 1. はじめに

現在、国内の大学において「『所謂ラーニングコモンズ』の構築」に関する議論が、図書館の教職員や学習環境に携わる教職員だけでなく、全教職員を巻き込んで、白熱している。あるいは、その白熱ぶりは国際的にみれば遅すぎるとも言えるのかもしれない。

「所謂ラーニングコモンズ」に関する議論では、学内においても、部署によって焦点が異なり、焦点が異なる為か、語彙の使用にもばらつきがあり、とかく混乱しがちである。本学に限らず、「所謂ラーニングコモンズ」についての定義が曖昧なままに、施設整備の議論が先行しがちであるという懸念は、しばしば話題となっている。このように、「所謂ラーニングコモンズ」に関する議論が混迷しがちであることの、主な原因のひとつは、「ラーニングコモンズ」という語そのものが複数の文脈から取り上げられ、語られているためであると考えられる。

このため、本稿では、学内の議論を、より活性化するためにも、まず、1.1にて、「所謂ラーニングコモンズ」を語る上で最低限必要と思われる観点について述べる。1.2では、「ラーニングコモンズ」という語について、本稿における定義を示す。1.3では、定義と観点を踏まえた上で、本ヒアリングの目的と、各ヒアリング対象となる大学に関する位置づけを述べる。その後、2.~7.にて、各大学の

実践事例について報告する。最後に、8.にて、他大学の事例から得られる本学にとっての学習場構築に係る示唆について総括する。

尚、本稿の1.と6.については中沢が、3.については児玉が、2.については池田が、4.については小倉が、5.については篠崎が、7.については今井と藤原が主に執筆した。ヒアリング全体を通じた考察は、中沢と児玉が中心となって行い、各章に中沢が追記した。

#### 1.1. 「ラーニングコモンズ」構築における観点

まずは、「ラーニングコモンズ」構築における観点に、どのようなものがあるのかについて、先に確認する。

「所謂ラーニングコモンズ」を議論する際、大きくは、①図書館機能の新展開としての「ラーニングコモンズ」、②アクティブラーニングを促進する学習環境としての「ラーニングコモンズ」、③コミュニケーションスペースの新展開としての「ラーニングコモンズ」、の3つの文脈で、議論が展開されていると考えられる((林ら、2010)(永田、2008)(米澤、2008)(上田・長谷川、2008)(ビーグル、2008)(米澤、2006)を参考)。3つの文脈はそれぞれ次のように整理する事ができる。

### 1.1.1. 図書館機能の新展開

#### (1) 概要

この文脈では、既存の図書館機能との対比が行われることによって、「ラーニングcommons」という語が規定されている。学問背景としては、図書館情報学分野が主である。

「ラーニングcommons」及び「インフォメーション・commons(ラーニングcommonsと一部同義で用いられる(例えば(米澤, 2008)がある。一方、定義を明確に区別する例は(ビーグル, 2008)(永田, 2008)である))」は、図書館が、1980年代にwwwが無料開放された際(「ペーパーレス化」の議論の中で)、危機感をもった図書館によって、特に力を入れて改革された分野である。それまでの教員や院生を主に対象とする「知の倉庫(ストック)」としての図書館から、学部生を主に対象とする「学習の場」としての図書館へと役割をシフト(あるいは拡張)することを意味している(米澤, 2008)。典型的には、①知識の出力の支援: ICT環境の導入によって、学生が自由にパソコンやプリンタ等を使って資料作成/資料出力/プレゼンテーション等を行えるよう支援する、②知識の創造の支援: 議論等に使いやすい什器(ホワイトボードや可動式のテーブルや椅子)によって、学生達が協調しながら新たな知識を創出できる(プレゼンテーション資料の構想を協力して練る中で、それぞれが自分の知見を加える等)よう支援する、というように、図書館の機能を強化している。図書館のそれまでの主な支援対象が教員や院生だったのに対し、ラーニングcommonsでは、学部生への教育の質向上がターゲットとなっている点も特徴的である(米澤, 2008)。

#### (2) 主な論点

この文脈では、ICTの環境の整備と併行して特に学習支援スタッフと図書館職員とのコラボレーション、学生スタッフの活用といった切り口の議論が多く見られる。「滞在型図書館」という語が「ラーニングcommons」の特徴を表す語として用いられており、「閲覧スペースへの飲食物の持ち込みの許可」「閲覧スペースにおける飲食の許可」「仮眠の許容」「24時間オープン」等、多様な学習スタイルの許容(既存の「自習する学生」というイメージからの脱却)も話題となる。

#### (3) 企画を考える際に必要な人員

これらの議論を行うためには、「学習支援」に関する専門員で、「自大学の学生の最近の傾向や特性」「学習支援サービスを効果的に展開するに不可欠な要素」等を把握している者と、「図書館サービス」「資料検索」に関する専門員で、「学習支援サービスを図書館で展開する際に、図書館の特性を最大化できる」者とが、必要になると考えら

れる。

### 1.1.2. アクティブラーニングを促進する学習環境

#### (1) 概要

この文脈では、「多様なメディアからのインプットに対し、学生が能動的に読解・作文・討論・問題解決などを通じて、分析・統合・評価・意思決定を行い、その成果を組織化しアウトプットする学習活動」(Bonwell and Eison, 1991)であるアクティブラーニング型の教育/学習支援を行う上での、適切な学習環境の構築が目指される。学問背景としては、教育工学分野が主である。

#### (2) 主な論点

ここでは、アクティブラーニング型の教育/学習を行う上で相応しいICT環境の整備・開発、什器の選定・開発、インテリア等についての議論が展開される。このとき①担当教員や学習支援員、コーディネータ等の、教育/学習支援を行う人間と学生(学習者)とのインタラクションの促進、②学生(学習者)の能動的な分析・統合・評価・意思決定、成果の組織化やアウトプットといった学習プロセスを促進する環境、といった観点から議論がなされる。当然ながら、この文脈においては、図書館に設置範囲を限定する事なく、「教室の改修、新設」「コミュニケーションスペースの改修、新設」等も話題となる。

#### (3) 企画を考える際に必要な人員

これらを議論するためには、当然、「アクティブラーニング」や「ファシリテーション」に関する専門員で、「インタラクティブな学習を展開するに不可欠な要素」等を把握している者と、「本学のICT環境」「設備・什器備品取り回し」に関する専門員で、「当該学習環境を実現する際に、図書館や教室等の既存のインフラ特性を活かすことができる」者とが、必要になると考えられる。

### 1.1.3. コミュニケーションスペースの新展開

#### (1) 概要

この文脈では、学習に繋がる学習者同士または学習者と教職員間のコラボレーションや対話の空間、「気分転換」「癒し」の空間、ヒューマンスケールで感性を刺激するような居心地のよい楽しい空間、としてラーニングcommonsが規定される。

#### (2) 主な論点

話題の中心となるのは、典型的には、国際交流スペース、休憩所や通路、踊り場、食堂等のキャンパス空間の改修や新設であり、如何に学習に対する刺激を与えるかという点が重要な論点となる。「見る/見られる」といった刺激を喚起する為に、シースルーパーティション(全面ガラス)や吹き抜け構造の導入等が話題となり、知的刺激を与え

るICT機器や遊具等の設置も話題に上がる。

上述の1.1.1や1.1.2との大きな違いは、キャンパス整備計画の全体がそのスコープに入る事と、日本語の使用の禁止等の外国語教育に特化した「特殊空間の創出」や「気分転換」「癒し」の機能が求められること、「ヒューマンスケールで感性を刺激するような居心地のよい楽しい空間」(林ら、2010)であること等が特に取り上げられる点である。

### (3) 企画を考える際に必要な人員

これらの議論を行う為には、既存のキャンパス計画の流れ(歴史)を把握している者と、本学学生の「過ごしやすさ」を適切に推定できる感覚を持った者、留学支援プログラムや語学学習に関する専門家等、特殊空間と親和性の高い学習プログラムに精通している者とが必要となろう。

このように、「ラーニングコモンズ」の構築を議論する文脈には、大きく3つの文脈が存在しており、それらは「学生の主体的な学びを促す」という大きな目的は共有しているものの、背景となる学問分野や関心の中心が異なっている。このような3つの文脈を踏まえ、次節にて、本稿における「ラーニングコモンズ」を定義する。

## 1.2. 「ラーニングコモンズ」という語の定義

「ラーニングコモンズ」という語は、その発生が図書館用語であるため、その軸足は図書館機能の新展開にある。しかし、本稿では、前述1.1.1~1.1.3の意味合いを内包して議論される「所謂ラーニングコモンズ」についての議論を可能とする為に、より包括的な定義を必要とする。

そこで、本稿の本項以降で扱う「ラーニングコモンズ」とは、「学生の主体的な学びを促す学習場」であり、「図書館のみならず、キャンパス内の日々の学生生活(当然に受講を含む)に対し、学生(特に学部生)の学習への刺激の質と量を向上する全学に開かれた共有のもの」とする。

ラーニングコモンズにおける刺激の特徴を1.1の議論をベースにまとめると、(a)各学生に適した学習支援(多様な学習の許容と促進) (b)学内の様々な学習支援サービスの統合(c)キャンパス滞在時間の増加のための工夫(d)教員や学習支援員とのインタラクションの増加(e)学生間のインタラクションの増加(f)ICTを中心とした学習環境におけるインフラの整備、が挙げられる。

## 1.3. 本ヒアリングの目的

本ヒアリングは、「ラーニングコモンズ」の構築においては後発となる「京都産業大学にとって価値のある学習

場」とはどのように構築しうるのかを探ることを目的として、実施した。

より具体的には、1.2の「ラーニングコモンズにおける刺激の特徴」で述べた(a)~(f)に対応する次の項目についてヒアリングを行った。

(ア)学習スタイルの許容の範囲((a)(c)に対応)

(イ)学習支援サービスの種類とスタッフ((b)(d)(e)に対応)

(ウ)ICT等の学習環境のインフラ整備に関する工夫((f)に対応)

これらの3つの項目について、「図書館機能の新展開(1.1.1)」を中心とした取組として、(i)お茶の水女子大学(2.にて報告)、(ii)上智大学(3.にて報告)、(iii)立教大学(4.にて報告)に、ヒアリングを行った。さらに、「アクティブラーニングを促進する学習環境(1.1.2)」を中心とした取組としては、(iv)東京大学(5.にて報告)に、「コミュニケーションスペースの新展開(1.1.3)」を中心とした取組としては、(v)武蔵大学(6.にて報告)に、ヒアリングを行った。最後に、(vi)東京女子大学(7.にて報告)に、「図書館機能の新展開(1.1.1)」と「コミュニケーションスペースの新展開(1.1.3)」に関する取組についてヒアリングを行った。

続く2.からは、これらのヒアリング内容を、大学別に報告する。

## 2. お茶の水女子大学附属図書館

ヒアリング対象:図書・情報チームリーダー1名

### 2.1. レイアウトと展開規模

お茶の水女子大学附属図書館は、全国に先んじて図書館にラーニングコモンズを設置した大学である。1階をアクティブな活動ができる、また飲み物を飲みながらリラックスできるゾーン、2階は、ディスカッションは行わない静かな伝統的図書館ゾーンとして整備している。

#### 2.1.1. 利用対象者と開館時間

利用対象者(2011年度):学生3,329 教職員1,369

開館時間:

月~金 8:45~21:00 (授業のない日は17:00まで)

土 9:00~17:00 (休業期間中は閉館)

#### 2.1.2. フロア構成

〈1F〉

##### (1) ラウンジ

ソファを設け、週刊誌・情報誌・新着新聞などを閲覧しながら、くつろぐことが出来る。外国製のチェア等も

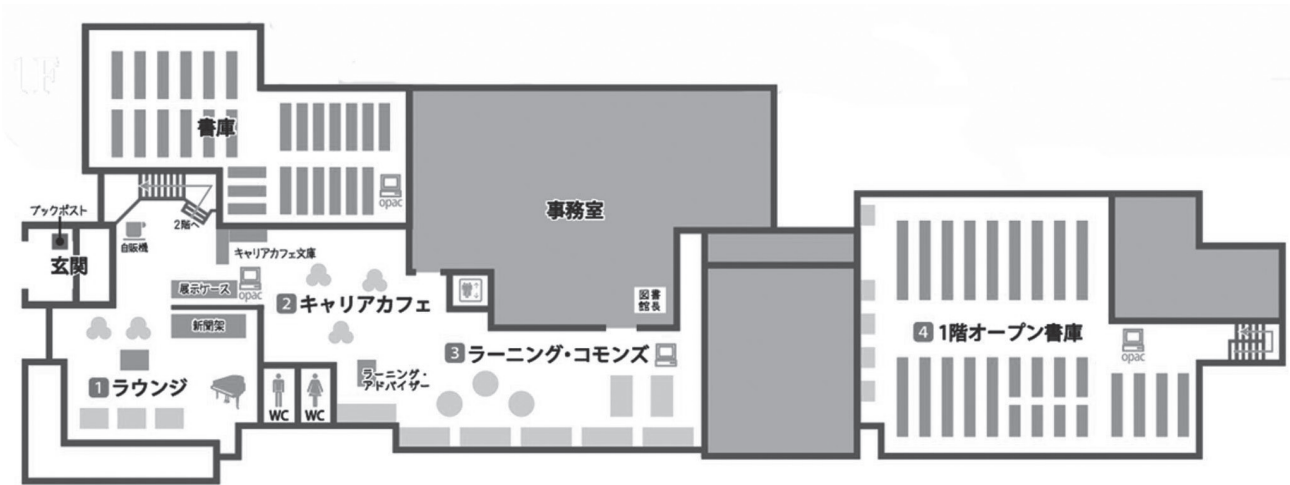


図1：お茶の水女子大学附属図書館1階見取り図(リーフレットより抜粋)

設置している。

また、ピアノ・コンサートを定期開催している(音楽表現コースとの協働による)。

#### (2) キャリアカフェ

平成19年12月開設。グループでの学習ができるテーブル・椅子を設置している。多様な学生支援サービスをワンストップで利用できるスペースである。キャリア支援センター・グローバル教育センターによる学習支援サービスの提供を行っている。

#### (3) ラーニングcommons

平成19年4月設置。約70台のPCを設置。持ち込みPCも利用可。

情報リテラシー講習会や授業を行うこともある。

#### (4) 書庫

#### (5) 事務室

#### <2F>

##### (1) クワイエット・スタディスペース

自習室であるが、閲覧室より静かな環境で学習できるスペースとしている。「ノートPC自動貸出ロッカー」(40台)を平成22年4月に設置している。

##### (2) 閲覧スペース

「ノートPC自動貸出ロッカー」(37台)を平成24年4月設置。

## 2.2. 運用の特徴

### 2.2.1. ラーニングcommons

ラーニングcommonsにはラーニング・アドバイザー(TA)が常駐している。PCの管理・運用は、情報基盤センターが行っており、2階の貸出ノートPCも同様である。

### 2.2.2. キャリアカフェ

就職セミナー等の企画・実施はキャリア支援センターが行っている。

### 2.2.3. リテラシー講習会

ラーニングcommonsも実施場所として活用している。「オーダメイド講習会」はグループ単位の要望に合わせて講習会を教員等と打ち合わせて実施している。

### 2.2.4. LiSA (Library Student Assistant)プログラム

図書館スタッフと学生との協働による図書館活性化プログラム。図書館業務の補助業務に携わり、キャリア体験ができる。LiSAの学生達は、展示や図書館ツアーなど自主的な企画にも取り組んでいる。

### 2.2.5. ラーニング・アドバイザー (TA)

ラーニング・アドバイザー (TA)は、ラーニングcommonsにおける、PC・プリンタなどの利用についてのアドバイザーである。レファレンスに類する質問に対しては2階のレファレンスカウンターを紹介している。



図2. キャリアカフェの様子(お茶の水女子大)

## 2.3. お茶の水女子大学ヒアリングまとめ

### 2.3.1. 学習スタイルの許容範囲

お茶の水女子大学が特徴的なのは、図書館の1階でピアノコンサート(音の許容)を展開している点である。このピアノ・コンサートを行っているラウンジは、防音装置どころか、壁によっても仕切られておらず、非常に開放的なイメージで、緩やかに周囲からゾーニングされている。

図書館に入ると、上述のラウンジ、キャリアカフェ、ラーニングcommonsとゾーンが続くが、いずれも壁は設置されていない。キャリアカフェにおいても、ラーニングcommonsにおいても、音の許容(会話の許容)が行われている。特にキャリアカフェは、キャリア支援センターによる企画が行われている最中は、場合によって、相当過密な状態となり、かなりの音量となると想像された。見学時には、ラーニングcommonsで学習していた学生達は、ほとんどイヤホンやヘッドフォンを使用し、外部の音を遮断し、好きな音楽等を聞きながら、学習を行っているようだった。

騒音と捉える学生がいないか尋ねたところ、静かに学習したい学生達は、2階(クワイエット・スタディスペース)へと足を運ぶため、問題は感じていないとのことだった。

それぞれのゾーンでは、飲料の持ち込みや、会話の可/不可について、細かく設定されているが、POPなサイン(A4横カラー)が提示されており、学生はこのサインに従って、快適に各ゾーンで振る舞っていた。

交流が促進・推奨されているゾーンとしては、ラウンジとキャリアカフェが圧倒的にその役割を担っているようで、ラーニングcommonsでは、情報環境を使用しながら個人学習する学生達が多いように見受けられた。ラウンジでは一人でゆっくりと本を読み、リラクセスする様子の学生が観察され、キャリアカフェでは3人のグループで学習している学生が見られた(訪問時は午前の早い時間であったため、利用学生は少なかったが、それでもこういった学生達の姿を観察できることが、利用率の高さを物語っている)。

尚、食事に関しては、基本的に許可されておらず、飲み物は指定されたタイプのものを、指定のゾーンに持ち込む事が可能である。

### 2.3.2. 学習支援サービスの種類とスタッフ

同大学では、commonsの展開場所が、図書館であることから、図書館スタッフによるレファレンスや資料へのアクセスは勿論格別に良い環境である。そこで、ここでは、図書館の通常サービスとは別に展開されているものを取り上げる。

### (1) LiSA

2.2.4にて報告したLiSAは、「図書館の中でキャリア経験を積める、学内インターンシップ・プログラムです。書架の整理やラベル貼りなど軽微な作業から見学者のガイドまで、多岐にわたる業務を経験できます。資料展示の企画などにも積極的にかかわり、実務を通して働く意識を育みます。」と同大学の大学案内(2013年版)では紹介されている。

チームリーダーの発言は、LiSAの学生が自身のキャリア形成だけでなく、図書館運営の重要な役割の一端を担っていると考えられる(例えば、現在では図書館内の書籍の軽微な補修のほとんどはLiSAの学生達が行っていると言う)ものが非常に多く、チームリーダーのLiSAへの信頼が窺えた。



図3. LiSAの学生達による展示(お茶の水女子大)

### (2) ラーニングアドバイザー (TA)

2.2.5にて報告したラーニングアドバイザーは、利用学生達にとっては、PCやプリンタ等のシステム上のトラブルを気兼ねなく相談できる存在である。

### (3) 様々な学習支援イベントの運営

同大学では、キャリア支援センターによる、キャリア支援関連のイベント、グローバル教育センターによる語学や留学に関するイベント等、多彩な学生支援の催しがキャリアカフェで展開され、可動式の机・ホワイトボード・椅子はその度に大きくレイアウトを変えて利用される。例えば、企業の展示ブース風にホワイトボードをパーティション代わりに4区画程に説明者ブースとして区切り、その前にスクール形式で椅子と机を並べる。相談ブース風にホワイトボードで机と椅子のセットを挟み込み、それをいくつも配置する、等がある。図書館と音楽表現コースとの協働によるピアノ・コンサートを始め、このような取組が図書館を利用する学生が必ず通る図書館の入り口付近で展開されることで、

「図書館に行けば色々な刺激が待っている」といった環境づくりに成功していると思われた。

### 2.3.3. ICTを中心とした学習環境におけるインフラの整備

ラーニングcommonsには、Mac及びWindowsのデスクトップPCが並べて配備してあり、構造柱と思われる柱にもその柱を取り囲むようにハイカウンターでデスクトップPCが備え付けられていた。学生は学生証をカードリーダーに翳し、Mac/Windowsのどちらのパソコンも使用する事ができる。

視察時にも情報基盤センターのスタッフの方が学生の様子を観察しており、特に問題がなくても、メンテナンスとして巡回しているとのことだった。こういった専門員による巡回が日常的に行われている事で、環境が劣化せずに維持されていると考えられる。更に、メンテナンスしながら学生の様子を専門員が観察する事で、学生のICT環境に関する潜在ニーズに敏感になるといった効果も期待できる。

「ノートPC自動貸出ロッカー」は、ノートPCの貸出し・メンテナンス業務を図書館で行う必要がない点が、導入に関する敷居を低くしていると考えられる。このように、図書館内の学習環境の向上を「図書館のサービスの向上」とセクショナリズムで捉えるのではなく、「在学生の学習環境の向上」と全学的な視野から捉え、制度を整えられる事ができるかどうか、質の高いラーニングcommonsを展開できるかどうかの分岐点の一つであると言える。

## 3. 上智大学ラーニングcommons

ヒアリング対象: 学術情報局局長、学術情報局図書館事務長、学術情報局図書館情報サービスチームリーダー

### 3.1. 展開規模とレイアウト

利用対象者(2012年度): 学生10,886 教職員295

開館時間:

月～金 8:00～21:00 (授業のない日は18:00まで)

土 9:00～20:00 (授業期間外は9:00～17:00)

広さは293㎡、グループワークエリア40席、プレゼンテーションエリア40席、PC優先エリア18席、学習支援席4席、サービスデスクとなっている。机・椅子はすべて可動式である。

学習支援席では、レポートの書き方などの相談に応じており、授業期間中の月曜から金曜、12:30から17:00まで実施している。スタッフには、大学院生を8名雇用している。スタッフの研修方法や学内の他部署との連携が課

題として挙げられている。

### 3.2. 運用の特色: 設置の目的と教育プログラムの展開

同大学では、設置の目的として、次の3点が掲げられている。①教育方法や学習形態(グループ学習・プレゼンテーション)の変化に対応した「場」としての図書館を構築するため、②図書館資料のみならず多様な情報リソースを収集し、学習に結び付ける学習環境を構築するため、③ライティングセンターへの発展も考慮に入れた情報リテラシー教育やレファレンスサービスの充実した学習支援環境の整備のため、の3点である。関連する教育プログラムとして、2009年11月には「レポート・論文の書き方セミナー」が開催され、2010年4月から大学院生の相談員による学習支援サービスが展開されている。

### 3.3. 設立までの経緯

新聞や雑誌の電子化推進により、空いた配架スペースを活用するための一案として、ラーニングcommonsが挙げられていた。

2007年度後半に図書館内において、課題別ワーキンググループ(WG)を6つ立ち上げている。第一に図書館システムWG、第二にフロア計画WG、第三に選書WG、第四に電子図書館WG、第五にレファレンスWG、第六に広報WGの6つである。

ワーキンググループの中でも、フロア計画WGが中心になって2008年度より、本格的な調査検討を始めている。2008年3月には、ラーニングcommonsに関する業者によるプレゼンテーションを実施した。2008年3月には、私立大学図書館協会海外集合研修で、ワシントン大学附属図書館のラーニングcommonsを見学した。2008年5月には、国内の先進事例である東京女子大学図書館を見学した。

これらの調査を踏まえて、2008年6月には、「2009年度特別予算概要計画」として、「中央図書館地下1階フロア機能の改善」と題する企画書を作成し提出している。この企画書の中では、「中央図書館地下1階の学生ラウンジを中心とした南側エリアを改修し、利用者が多目的(コミュニケーション、グループ学習、持込PC利用、喫茶、海外ニュース視聴等)に利用できるスペースに改修し、「場」としての図書館機能を強化する」ことがうたわれている。

2008年10月には、「中央図書館地下1階多目的スペース化」を目的とした「2009年度特別予算」を申請している。2008年10月には、当初計画していた地下1階南側学生ラウンジのコーヒーショップへの転用は施設面から不可能

であるとの結論が出ている。その結果、学生ラウンジを除くエリアの改修を計画した。2008年11月には、全学共通教育委員会の委員と面談し、「人文系学部におけるグループ学習の必要性」や「ライティングプログラム」へのニーズの高さを確認した。2008年12月には、「中央図書館における総合学習支援環境の整備について」という企画書を学内の上部委員会に提出し、利用者ニーズ、利用ルール、利用支援要因などの点に意見があり、継続審議となる。

2009年1月には、図書館閲覧席、グループ学習室等の利用状況調査を2週間程度実施し、グループ学習室やコンピュータールームの需要が高いことを確認した。2009年2月に学内の上部委員会で計画が承認され、2009年10月よりラーニングコモنزの利用が開始されている。

今後は、図書館以外の場所への展開も考慮されているという。

### 3.4. 上智大学ヒアリングまとめ

#### 3.4.1. 学習スタイルの許容範囲

同大学では、図書館の改築・改修に関する議論を発端として、学習活動の形態変化の話題へと発展した。その際、大学の上層部も、学食にて学習内容やクラブの活動について議論する学生達の様子を日頃から観察しており、議論の場に関する学生のニーズを把握していたという。

同大学では、ゾーンがそれぞれ部屋と対応しており、明確に区切られていることが特徴である。ゾーン毎の飲食や会話の許容に関しては、お茶の水女子大学と同様、A4カラーでサインを作成しており、入り口にも室内にも、学生達の目につくところに掲示されている。平日の朝早くという時間帯にも関わらず、コモنزでは学生達がホワイトボードとノートパソコンを使用して協調学習を行っている様子が観察された。窓側に向かってノートPCを使用して一人で学習している学生も同時に観察され、静謐空間は別途用意されている事から、「静かな空間で集中したい」といった学習ニーズの他に、周囲が会話している環境下で学習したいというニーズが確かに存在している様子が確認された。

ラーニングコモنزは、防音を行っておらず、通気口が2カ所あり、音がかなり周囲に漏れるとの事だったが、学生は音に慣れており、上階まで音が響き渡るという事はないということから、問題にはならない。学生達が白熱してくると、自然と声量は大きくなり、コモنزの中はかなりの騒音となるが、そのような状況下でもコモنز内の個人学習席は人気があると言う。学生が自分の好みに応じて環境を選べることが重要であることが確認された。

尚、食事に関しては、基本的に許可されておらず、飲み物は蓋付きのものを、指定のゾーンに持ち込む事が可能である。



図4. コモンズを通路から見た様子(上智大)



図5. 学習支援席(上智大)

#### 3.4.2. 学習支援サービスの種類とスタッフ

お茶の水女子大学と同様に、同大学も図書館で展開するコモنزであるため、図書館内で通常展開されているサービス以外のものについて、ここでは見ることにする。

##### (1) 学習支援席(TA)

3.1~3.2にて報告した学習支援席は、大学院生が、学部生に対し、レポートの書き方、プレゼンテーションの行い方に関する助言を行うサービスである。ヒアリングでは、出来る限り支援的に、フラットな関わり方を学部生にして欲しいという発言が得られた。同大学に限らず、院生が学部生に支援を行うとなると、「先輩が後輩を教える」というスタンスになりがちである。

相談内容を見てみると、卒論の書き方に関する相談は少なく、一年生からの、レポートの書き方に関する質問が多いことから、初年次教育へのニーズとして捉える事もできるという見解が示された。

運営に関する教員との連携も考えながら今後もサービスの洗練を続けて行くとの事で、データに基づきながら、



企画・実施・検証を繰り返し、提供方法が洗練されている。

#### (2) 学習支援席(専門スタッフ)

図書館付きの専門スタッフが1名、コモンズに常駐し、プレゼンテーション機器の使い方やノートパソコンの貸出しについて対応している。

#### (3) 様々な学内公開セミナーの実施

コモンズでは、可動式の椅子と机、プロジェクタ等のICT環境を活かし、様々なセミナーが実施されている。また可動式パーティションによって、完全に部屋の一部をセミナールームとすることも可能となっている。コモンズとして利用したい学生は、パーティションの外を通常通り使用する事が可能である。セミナー等の実施は、全面ガラスの外側(通路)から見渡せるように設計されている。いずれのセミナーも、カウンセリングセンター、国際交流センター、学生センター、各学部等と図書館が連携して実施されている。

#### 3.4.3. ICT等の学習環境のインフラ整備に関する工夫

OAフロアのコモンズ内では、床から学生達が自由に電源を供給する事ができ、ノートPCの貸出しに加え、スクリーン/プロジェクタが整備され、学生はいつでもプレゼンテーションを行う事ができる。更に、使用に際し、専門スタッフ(3.4.2(2)参照)の助力を得る事も可能となっている。

コモンズ内の個人学習席では、無線LANを使用する事が前提とされており、無線LANに接続する為の簡単なマニュアル(A4で2~3ページ程度)が用意されており、学生達は自分でマニュアルを確認し、接続している。接続トラブル等が発生することもあるが、学生達はそのほとんどを学生同士で解決しているとのことだった。

同大学では、図書館、メディアセンター、研究支援センターの局長が兼務となっており、ICT環境と、学習支援、研究支援サービスが、連携がしやすい組織作りが行われている。

### 4. 立教大学池袋図書館

ヒアリング対象: 図書館利用支援課課長1名

#### 4.1. 展開規模とレイアウト

開館時間:

月~金 8:45~22:30

土 8:45~20:00

日祝 10:00~17:00

立教大学池袋図書館は、平成24年9月にできたロイド

ホール(鉄骨鉄筋コンクリート造、一部鉄骨造)の地下2階~地上3階および隣接する12号館地下2階~地上1階で構成されている。延床面積、約19,000㎡、閲覧席数1,520席、最大収蔵冊数200万冊の大規模な図書館である。地下2階を除く図書館内全域で無線LANの利用を可能とし、貸出用パソコン(300台)を含め600台のパソコンが設置されICT環境を整えている。

図書館2階には、グループワークができる場として、グループ学習室(18席6室、12席2室)が8室、講習会室(50席)が2室あり、可動式の机・椅子、ホワイトボード、大型ディスプレイ、パソコンなどが設置されている。

また、ロイドホールと12号館の接続部にあるエントランス付近の1階、2階には「ラーニング・スクウェア」と呼ばれる学生たちが個人またはグループで気軽に利用できる学習スペースがある。ラーニング・スクウェアの2階は自動ドア(全面ガラス)があるものの、もう一方は階段になっており、壁はない。1階には明確な仕切りは設けられておらず、緩やかなゾーニングとなっており、エントランス付近には学生達の声が、一定音量でザワザワと常に聞こえている状態であった。ラーニング・スクウェアでは学生達が資料を広げながら個人またはグループで一定以上のテンションで学習しており、学生達が個人的な対話で談笑するといった用途では使用しにくい雰囲気が漂っており、実際に、見学当時、そういった利用を行っている学生は見られなかった。ホワイトボードは、年間でホワイトボードマーカーが2,000本程消費するペースで使用されている。ホワイトボードの使用頻度が高いことも、ラーニング・スクウェアが昼と同じように夜10時くらいまで賑わっているということも、授業でグループワークを要するものが多くなっていることからの需要の高まりではないかと同大学では捉えている。

建築としては、建物の四隅に耐震壁を含めた構造体を配置し、後はすべて細い柱として、視野を遮る壁のない大空間を確保したことが特徴である。壁が全くなく、ニーズに応じてゾーン変更することが容易であるというメリットがある。特に地下1階は、非常に高い天井と、反対の壁までずらりと書架が並んでいる様子を見通せるフロア構成は、高校までとは違った、特別な空間に來たと学生達に感じさせることに効果的であろう。

#### 4.2. 運用の特色

ラーニング・スクウェアでは、音を気にせず自由に会話や議論ができる。配備されている机や椅子、ホワイトボードは可動式となっており、これらを自由に組み合わせる

ことより、学生にとってグループワークし易い環境となっている。食事は館内の二カ所で取ることができ、ペットボトルや蓋付きのドリンク等は館内のどこへでも持ち込みができるため、長時間滞在することが可能となっている。

ラーニング・スクウェアの2階には、メディアセンター(コンピュータやマルチメディア機器の利用によって教育・研究を支援する組織)と協働で運用するパソコン貸出カウンターがあり、ノートパソコン300台の貸出およびパソコンヘルプサービスが提供されており、インターネットを利用した学習やグループワーク等もできるようになっている。

このような学生の学習を支援するサービスとして、図書館2階のカウンターでは大学院生のラーニングアドバイザーと、学部生のパソコンヘルプスタッフを配置し、レポート・論文作成や、パソコンのヘルプサービスなどの学習支援にあたっている。

#### 4.3. 立教大学ヒアリングまとめ

##### 4.3.1. 学習スタイルの許容範囲

立教大学では、図書館を新築したこともあり、様々な学習スタイルを許容できるような配慮がなされている。キャレルデスク、ハイチェア、ホテルのロビーのような雰囲気ソファ席、仮眠も可能な窓に向かった大型ソファ席、ガラス張りの研究個室、数名で利用できるガラス張りのグループ学習室、セミナーも実施できる広さを持ち、グループ学習でも利用できる講習会室、4.2で述べたラーニング・スクウェア、と挙げ始めればきりが無いほどの環境が学生に提供されている。図書館内の什器、ファブリックは、意匠にも統一感があり、機能性やデザイン性等に拘りを持って外国製の家具も積極的に導入したという。無論、図書館の新築事業の一貫としてこれらの環境整備は行われているため、十分な予算が投じられており、こういった取組に他大学が追従することは困難であると思われる。一方で、これだけのバラエティに富んだ学習環境を、学生達がそれぞれに活用し、学習している姿を確認することができた点は意義深かったと言える。学習を促進する視点から構造柱の配置などの建築構造の設計を行っている点も、多くの大学において参考となる点である。

蓋付きの飲み物を全館で許容しており、弁当等を持ち込み、食事をすることができるスペースも館内に設けられている。

特に立教大学が印象的であったのは、飲食や会話に関するルールのサインがほとんど見られない事であった。

ゾーンの手前に表示が提示されているのみで、基本的に館内に使用ルールに関する掲示は一切ないと言っても良いほどである。ヒアリングでは、美的センスからの解説がなされたが、学生は、自分で各ゾーン(場)に相応しい振る舞いを考えよというメッセージとして受け取るのではないだろうか。掲示が少ない事で、学生のモラル低下が見られないかという質問には、見つけたら都度注意しているので、特に問題は感じないとのことだった。見学中に、壁に設置されている掃除機用のコンセントから携帯電話の充電を行っている学生にスタッフが注意をしている場に遭遇したが「壁のコンセントはコードに足をひっかけて危険なので、閲覧席のコンセントを利用ください。」という丁寧なもので、学生を全く子供扱いしていない様子が窺えた。筆者は、その学生の見ために、派手な印象を持ったが、すぐに充電を中断して、作業に戻っていたことも印象深かった。尚、携帯電話による通話もラーニング・スクウェアで許可されている。就職活動中の学生に、走って館外に行かれるよりも、よほど図書館内の秩序を保つ事が可能だという。

モバイル機器及びPCの電源供給用として、館内のデスクに備え付けの電源を全て学生に開放している点も特徴である。モバイル機器の充電を許容する理由は、図書館が提供しているOPACや様々なサービスはパソコン同様、モバイル機器でも利用できることによるものである。更に、同大学では全てのコンセントが開館中、フルに使用された場合の試算(10数万円とのこと)も行った上で、問題ないと判断している。このような対応は、長時間キャンパスに滞在し、ネットワークを駆使する学生にとって、非常に重要な支援となるだろう。ルールによって学生の活動を制限すれば制限する程、学生にとってはモラルの低い学生に、意欲の高い学生が合わせて学習しなければならない環境を強いることとなることを、改めて感じさせられる図書館である。

尚、入館時と退館時に学生達はエントランスで学生証を翳してゲートを通過しており、各学生の図書館の滞在時間について確認可能なインフラが整備されている。

##### 4.3.2. 学習支援サービスの種類とスタッフ

同大学も、図書館内での取組であるため、図書館の通常サービスは除外して報告する。4.2で述べたように、同大学の図書館2階では、ラーニングアドバイザーやパソコンヘルプスタッフの2つの学生による学習支援サービスが隣りあって展開されている。更に、ラーニング・スクウェア(2階)では、スタッフがノートPCやケーブル類の貸出し、トラブル対応を行っている。

(1) ラーニングアドバイザー (大学院生)

ラーニングアドバイザーは博士後期課程の学生を雇い、平日の12時～17時までサービスを提供している。ライティング指導が中心であり、異なる分野の学生が2名サービスに当たる。簡単な助言は常駐しているカウンターでそのまま行い、カウンターの背後に簡易パーティションで3名程座ることができるミーティングスペースがあり、込み入った指導は当該スペースにて行われる。

(2) パソコンヘルプスタッフ

こちらは、学部学生をメディアセンターがトレーニングし、(1)のラーニングアドバイザーの隣でサービスを提供している。同じく、簡単な対応であればカウンターで行い、込み入った相談はバックヤードのミーティングスペースで行われる。

4.3.3. ICT等の学習環境のインフラ整備に関する工夫

同大学は、ノートPCに関して、大学規模に合わせて豊富に貸出しを行っている。50人収容可能な講習会室は、メディアセンターがスピーカーやスクリーン、操作卓等の選定を行っており、図書館の内部のインテリアとは調和しながらも専門知識をベースとしたものとなっている。メンテナンスについても、図書館ではなく、メディアセンターのスタッフがあたっている。

ラーニング・スクウェアでは、OAタップの貸出し(箱にまとめて入れてあり、学生達は自由にそこから取って使用後、箱の中に返却する形式)が行われていた。学生達は、床から直接電源を取るのでは不十分で、床からOAタップで電源を取り、机の周囲や上で分配しながら使用していた。



図7. グループ学習室(立教大)

5. 東京大学アクティブラーニングスタジオ

前述の2～4.では、主に1.1.1で述べた図書館機能の新展開からの事例を見た。ここでは、1.1.2で述べた、アクティブラーニングを促進する学習環境という観点からの事例に関するヒアリングについて報告する。

ヒアリング対象: 教養学部附属教養教育高度化機構教員3名、受講生1名 計4名

5.1. 展開規模とレイアウト

駒場キャンパス内にある17号館2階の教室(18m×18m)を改修し、アクティブラーニング専用の「KALS(駒場アクティブラーニングスタジオ)」を運営している。アクティブラーニングを構成する教室の機能として、①授業を展開する「スタジオ」、②スタジオを支えるバックヤード(スタジオで使用する什器やノートPC、タブレット、ケーブル類等を収納している「倉庫」、KALS担当助教の使用する「スタッフルーム」、教材を作成し、授業の打ち合わせに使用する「ミーティングルーム」から構成される)、③学生が授業前後に滞在したり、他の授業を見学したりする事に使用できる「ウェイトングルーム」、から構成される。

スタジオは定員40名となっているが、最大で50名まで収容可能である。スタジオの広さは12m×12mの約144㎡であり、通常の教室であれば、100名が着席できるだけの面積となっている。



図6. 窓に面したソファ席(立教大)

## 5.2. 運用の特色

KALSの最大の特徴は、教育工学を専門とするスタッフ(助教)が2名常駐しており、教養教育におけるアクティブラーニングについて、授業開発と授業支援の両方を行っている点である。これまで見たように、各大学のICT環境の質の保持、向上には、専門スタッフが学生利用に直接関わる事が不可欠である。東京大学では、それだけでなく、環境について研究できるだけの力をもった専任教員を抱えていることが特徴的であり、「理想的教育」を体現しようとする意気込みにも圧倒された。

見学時には、助教の1名と学生スタッフ(大学院生)1名の計2名が授業補助の役割を担っており、教室の状況や学生の様子を見ながら机や椅子の配置を授業開始前から準備し始める。担当教員が教室に入ると、PCの接続やスクリーンへの出力を助教と共にいき、スムーズに授業が開始された。授業中も、遠隔で授業に参加する学生が違和感なく議論に参加できるよう、助教と学生スタッフがWebカメラやホワイトボード、天井スピーカ等を効果的に配置・調整していた。授業終了後も、学生は議論の続きを行っており、いかに教室が快適であるかが窺える。助教も学生スタッフも学生達を追い出すようなことはせず、片付けを淡々と行っている中で、学生達が自然に退室していった。授業終了後、担当教員の許可を得て、学生に簡単なヒアリングを行ったところ、学生は非常に快適で、授業を受ける中で、ストレスを全く感じた事がないと発言していることにも驚かされた。ICT機器を駆使した授業で、教員や受講生にストレスを感じさせないスムーズな授業を運営可能としていることは、KALS専任教員が専門性から適切な環境整備を行っている事に加え、細やかな配慮が行き届かせている事の証明とも捉えられる。

## 5.3. 東京大学ヒアリングまとめ

### 5.3.1. 学習スタイルの許容範囲

アクティブラーニングを促進する学習環境の整備を目的とする本取組には、5.2.で見たように教員の教授スタイルの許容範囲とでも言えばよいのか、教員のニーズに対し、柔軟な対応を行える点が重要となる。このような教員による自由度の高い授業運営は、学生にとっては知的刺激の最たるものとなりうる。

尚、授業開始前に学生達が授業準備が終わるまで待機できるように整備されているウェイトングルームでは、ノートPCや教科書を用いて、ちょっとした時間でも学習が可能となっている。リラックスできるような色合いの家具類が置かれており、滞在しやすいように配慮されて

いる。

### 5.3.2. 学習支援サービスの種類とスタッフ

5.2で述べたように、アクティブラーニングスタジオで展開される授業では、担当教員の他に、教育工学を専門とする助教1名と、大学院生の学生スタッフ1名が、授業内で教員と学生を支援し、円滑な授業運営と、先進的な教授法の促進を行っている。

## 6. 武蔵大学

### MCV (MUSASHI COMMUNICATION VILLAGE)

本稿2.~5.では、主に1.1.1で述べた図書館機能の新展開及び1.1.2で述べたアクティブラーニングを促進する学習環境を中心とした各大学の状況を見た。本節では、1.1.3に述べたコミュニケーションスペースの新展開の観点からの事例として、武蔵大学のMUSASHI COMMUNICATION VILLAGE (MCV)の事例に関するヒアリングについて報告する。

ヒアリング対象:外国語教育センター事務室 事務長1名 職員1名 計2名

### 6.1. 展開規模とレイアウト

武蔵大学MCVは、武蔵大学の新1号館の竣工に伴い、同館3階の一角に設置されており、キャンパス内留学の場として機能している。エリア内は、事務室・ワークショップルーム・フォーカスエリアとリラククスエリアに分かれており、学習のレベルや内容に沿った使い分けがなされている。

施設面では、ポップな印象の家具や壁紙が使用されており、自由に活発でありながらアットホームな雰囲気確保され、居心地の良い空間が作られていた。

2012年10月11日に開村された後、全学生のおよそ15パーセントの学生が利用登録をしており、今後、利用者の増加を図る活動を行うとのことであった。

### 6.2. 運用の特色

MCVでは、英語を公用語とし、原則的にエリア内での日本語会話は禁止とされており、積極的に語学習得に取り組む学生のみ、登録制で使用できる環境となっている。登録した学生にはパスポートが発行され、入退室のチェックは、機械での読み取りシステムが構築されている。

プロによる英会話のレッスンが無料で受けられる他、ネイティブスピーカーレベルの学生とのフリートーク、年中行事(クリスマス・パーティー等)の開催などにより、

語学・文化の交流が盛んに行われている。

### 6.3. 武蔵大学ヒアリングまとめ

#### 6.3.1. 学習スタイルの許容範囲

MCVでは、語学教育に意欲の高い学生にMCVパスポートを発行する事で、学内留学とでも呼べるような感覚を定着させる事に成功している。これはMCVの中が特殊空間として他の学内スペースと学生にはっきりと区別して認識されている事を意味している。一方で、ワークショップエリア、フォーカスエリア、リラクセスエリアとエリア毎に雰囲気を変える事により、学生達が英語環境の中でも自由に、様々な学習態度を取ることを許容している。

#### 6.3.2. 学習支援サービスの種類とスタッフ

MCVでは、一般の専任教員とは勤務形態の異なる専属の教員を雇用し、教育効果の向上が図られており、語学に長けた職員スタッフの雇用も行われている。さらに学生スタッフ制度も設けられている。学生スタッフは、英語力にあわせて、アルバイトスタッフとボランティアスタッフに分けられており、各自が、自分の語学力に応じた業務を行うような仕組みが構築されている。

	Survivor in English	Who am I?	Theme Specific Scrabble	Origami in English	Theme Specific Scrabble	Survivor in English
1階						
2階		3/6	0/6	0/6	0/6	0/6
3階						
4階	4/6					

図8. モニタに映し出される英会話教室の時間割



図9. MCVでは本格的なコーヒーを楽しむことができる

## 7. 東京女子大学

(図書館及びキャリア・イングリッシュ・アイランド)

東京女子大学は、学部は現代教養学部1学部を設置し、学科は「人文学科」「国際社会学科」「人間科学科」「数理科学科」に分かれ、それぞれ専攻を持つカリキュラムとなっている。学生数は約4,000人である。

### 7.1. 図書館

ヒアリング対象: 図書館課 課長1名

#### 7.1.1. レイアウトと展開規模

1996年に新築された地下1階地上3階の図書館の1階フロアと2階の一部を2007年度末に改修し、新しいコンセプトのもと1階を図11のとおり構成し、2階は電子メディアコーナーを個人ブースに変更した。

[1] 利用対象者と開館時間

利用対象者(2012年5月1日現在):

学生4,144人 教職員555人

開館時間:

月～金 8:45～21:00 (夏冬春期休暇中9:00～21:00)

土 10:00～18:00 (夏冬春期休暇中も同じ)

日 10:00～18:00 (定期試験期等)

[2] フロア構成

〈1F〉

#### (1) プレゼンテーションルーム

PCを利用した発表やイベント実施での利用を想定して設置。小人数授業での利用も可能。外からの視線に慣れる練習になること、また他の図書館利用者の興味をひくことを期待してガラス張り。

#### (2) コミュニケーション・オープンスペース

貸出用のシンククライアントPCを利用し、図書館提供の各種ソフトや電子資料も利用可能。テーブル・椅子の配置は変更可能で、自由に意見を交換し、グループ学習ができるスペース。

#### (3) リフレッシュルーム

気分転換できる空間として、館内で唯一飲食可能なスペース。会話可。貸出用のシンククライアントPCの利用が可能。

#### (4) メディアスペース

ワード、エクセル、パワーポイントを備えたPCを約50台設置。学習スペースであるが会話は可能で2～3人で利用する姿も見られる。

#### (5) グループ閲覧室

遮音性の高い部屋。1部屋6人まで。貸出用のシンククライアントPCの利用が可能。

(6)その他

DVDやビデオを2~3人で一緒に観ることができるAVブースや、新聞雑誌閲覧室を設置。

〈2F〉〈3F〉

図書館従来(伝統的)の機能に加え、2Fには貸出用のシンクライアントPCの利用が可能な個人ブース(学習個室)やガラス張りの開放感あふれる吹き抜けのブラウジングルームを設置。3Fには初代学長である新渡戸稲造文庫等を設置。また、遮音性は低いが3室のグループ学習室を既設。グループ学習室の収容人数は1室あたり8~12名。可動式パーティションを設置し、利用人数に対応。

〈地階〉

雑誌やレファレンス資料を中心とした配架の他、政治学者・思想家である故丸山眞男の蔵書を中心とした丸山眞男文庫を設置。

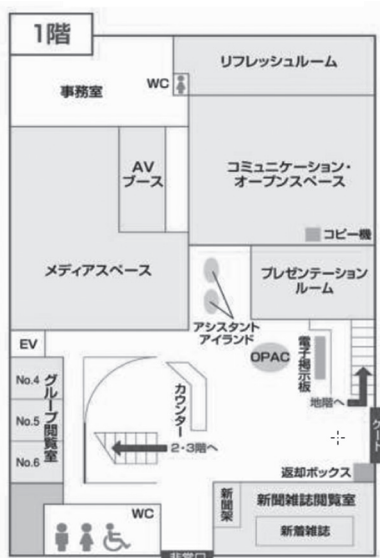


図10. 東京女子大学図書館1階のフロア構成  
(東京女子大学ホームページより抜粋)



図11. 東京女子大学図書館の外観

7.1.2. 運用の特徴

ラーニングcommonsとしての役割も果たす図書館による「マイライフ・マイライブラリー」プログラムは、「学生の主体的・自立的学習を図書館が支援することを目指す」という理念のもと、次の3つの体制を柱としている。

[1]滞在型図書館

「多様化する学生のニーズに応えた多様なスペースを提供する」ことをコンセプトに、図書館本来の機能に加え、学生の要望や特性にあわせて活動内容の異なる複数のスペースを配置し空間をつくることで、利用者一人ひとりの利用目的にあわせたフロア展開となっている。

[2]学生協働サポート体制

支援される立場からアシスタントとして支援する立場を経験することで、学生自身の成長を目指す取り組みである。ボランティア・スタッフ、サポーター、システム・サポーター、学習コンシェルジュの4種の学生アシスタントが活動している。

[3]学習支援プログラム・他部署との連携

初年次学習支援として、「基礎的日本語能力養成講習」を提供している。また、学習コンシェルジュと図書館員による情報検索と基本的なレポートの書き方のガイダンスを実施している。他部署との連携については、キャリア・センターとのコラボレーションなどがなされている。

7.2. キャリア・イングリッシュ・アイランド

ヒアリング対象:現代教養学部教授・講師各1名 計2名

7.2.1. レイアウトと展開規模

「キャリア・イングリッシュ・アイランド」は8号館2階に位置し、様々なサービスを全学生が随時受けることができる場所である。

部屋の中には、持ち運びが自由で、積み重ねることができる「ミーティングチェア」が用意され、授業スタイルに合わせてレイアウトを変更できるようになっている。壁に「キャリア・イングリッシュ課程」の受講生各々が企画・作成したポスター(海外ボランティア経験者による自己活動発表会等)が掲示されており、全学生が発表を聞くことが可能である。

尚、フロア構成は、図12、13の通りである。

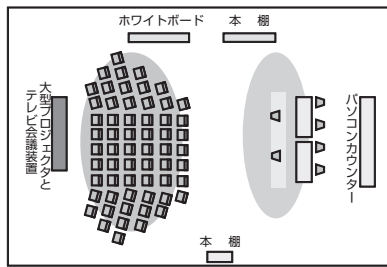


図12. キャリア・イングリッシュ・アイランドのレイアウト図(東京女子大)



図13. キャリア・イングリッシュ・アイランドの様子(東京女子大)

### 7.2.2. 運用の特徴

「キャリア・イングリッシュ・アイランド」は全学生を対象としており、3種類の英会話講座と、英語学習やキャリア構築に関する企画を受講できる(後述[1]～[3])。

「キャリア・イングリッシュ・アイランド」プログラムの1つである「キャリア・イングリッシュ課程」という、1年次の希望者(約150名)の中から60名を選抜し、3年間をかけて英語で自己発信する力を養う独自のコースも展開されている。当該カリキュラムでは「コミュニケーション能力育成科目」「キャリア探求英語科目」「グローバル・ビジョン拡大科目」などの多彩な科目が用意されており、演習科目である「討論演習」「トータルプレゼンテーション演習」等で学生の積極性や行動力を育てている。課程生の先輩・後輩の結びつきも強く、就職活動時にアドバイスを受けるなど、お互いに刺激を受けながら成長しているという。

#### [1] Native Speakerによる英会話トレーニング講座

##### ①レベル別英会話トレーニング

楽しい会話から国際問題に関する議論までをテーマとしており、トレーナーは教員が務める。

##### ②TOEFL講座と英語Speaking講座

自己発信と臨機応変のコミュニケーショントレーニング

をテーマとしており、トレーナーは外部契約講師が務める。希望登録制であり、学生の予約が多く抽選制で対応している。

##### ③留学生との英会話

日常の話題について友達と気楽に英語で会話することをテーマとしており、海外留学生が会話のパートナーを務める。

##### [2]英語とキャリア形成支援のための講演会・セミナー

社会の第一線で活躍する卒業生や企業人が講師を務める。キャリア・カウンセラーによるランチタイム・セミナーを毎月行っている。

##### [3]図書の貸出

学生は英語とキャリア形成に関する書籍やDVDを借りることができる。

### 7.3. 東京女子大学ヒアリングまとめ

#### 7.3.1. 学習スタイルの許容範囲

##### (1)図書館

図書館従来の“静穏な環境”と会話可能な“交流”の場、そして“学習”と“リラクゼーション”の場など利用目的に応じて異なるスペースと設備が設けられている点、さらには外部評価において成功の要因の一つとされた「‘学んでいる姿を見る／人から見られる’効果・影響は大きく、館内から見える景色にも配慮が払われている」空間創出という観点からは、目的別に応じたフロア構成と並んで空間設計が重要であることを再認識した。

##### (2)キャリア・イングリッシュ・アイランド

キャリア・イングリッシュ・アイランドでは、英語に触れたいと感じている学生が、いつでも英語に触れることができるようオープンな空間が提供されている。アイランドに来た学生は、配架図書や雑誌・新聞・DVD資料を利用し、英語やキャリアに関する知識を深めることが可能である。また、「テレビ会議装置」を利用して、海外の大学生とリアルタイムで討論し、同世代の海外の学生との文化や価値観の違いを直接に体験できる。

#### 7.3.2. 学習支援サービスの種類とスタッフ

##### (1)図書館

貸出用のPCをはじめとする設備・機器のメンテナンスや管理、利用のサポートは、図書館がシステムエンジニアと契約して対応している。学生の能力の育成・向上という点においては、4種の学生アシスタントを積極的に活用している。7.1.2.で述べたように、この学生アシスタントによる学生協働サポート体制は「マイライフ・マイライブラリープログラム」の特徴の一つであり、被支援者は自分



図14. 壁に展示された自己活動発表会ポスター  
(東京女子大)

の目的に応じてアシスタントを選ぶことができ、支援者は自身のスキルや特性にあわせて活動できるという利点がある。

また、ラーニングコモンズの役割を果たしている図書館の運営においては、他部署との連携が積極的に行われているところが大きい。

#### (2) キャリア・イングリッシュ・アイランド

プレゼンテーション等の指導にあたるネイティブ・スピーカーのトレーナーや、国際ビジネス経験豊富なアドバイザー等のスタッフを配置し、仕事で英語を使うというニーズに応じるためのトレーニングやアドバイスをを行う。英語で活躍する人々による講演会のセミナーでは、必要に応じてキャリア・センターとも提携している。アメリカからのインターン学生との交流、海外の大学とのビデオ・カンファレンス等のイベントを開催している。

### 8. まとめ

2～7では、「図書館機能の新展開(1.1.1)」を中心とした取組として、(i)お茶の水女子大学(2.にて報告)、(ii)上智大学(3.にて報告)、(iii)立教大学(4.にて報告)に、ヒアリングを行った。さらに、「アクティブラーニングを促進する学習環境(1.1.2)」を中心とした取組として、(iv)東京大学(5.にて報告)に、「コミュニケーションスペースの新展開(1.1.3)」を中心とした取組として、(v)武蔵大学(6.にて報告)に、ヒアリングを行った。最後に、「図書館機能の新展開(1.1.1)」と「コミュニケーションスペースの新展開(1.1.3)」に関する取組として、(vi)東京女子大学(7.にて報告)に行ったヒアリングの内容について報告した。こ

こでは、各大学のヒアリングまとめにて報告した内容を振り返りながら、次の8.1～8.3の論点について、本学の今後の展開において重要であろう示唆について総括する。

#### 8.1. 学習スタイルの許容範囲の拡大

各大学では競うように図書館、教室、コミュニケーションスペースにおけるルールの緩和が行われていた。これらの動きは、学生達の学習スタイルの多様化に応じて、様々な学習スタイルを積極的に承認する態度を大学が見せ、学習者自身が、先行して自由に、主体的に学ぶ学習者達の態度を大学内のそこかしこで目の当たりにする事によって、態度形成を促す効果があると考えられる。特に立教大学においては、学生を子供扱いしない徹底した態度が観察された。今後、ラーニングコモンズを展開する上で、意義深い点であった。

#### 8.2. 全学的な視野からの企画及び運営のための体制づくり

それぞれの大学における取組では、自大学の人的リソースを駆使してラーニングコモンズの構築を行い、運営している様子が確認された。このような運営努力の上で、コモンズの構築においては、全学的な視野から、学内の既存の専門性を活かしながら企画が行われ、部署間の連携を行うためのそれぞれの工夫があった。教養教育に特に注力している大学においては、こういった全学的な取組を行う為の組織的な基盤が整っているため、学内の議論を進めやすいのであろうことも、お茶の水女子大学、上智大学、東京大学や東京女子大学等の事例から推察された。

#### 8.3. 専門スタッフの必要性

ICT環境を導入し、活用しようとした場合、専門スタッフ(可能であるならば、学習環境の研究スタッフ)が必要である。専門スタッフ抜きに運営を行うと、たとえ什器や機器が同じものであっても、学習の品質には大きな差が出てしまうと考えられる。この時、サービスの展開場所ではなく、サービスの内容に関する専門性を優先して議論する必要性について、各大学から理解を深める事ができた。

本ヒアリングでは、特に1.1.1の図書館機能の新展開としてのラーニングコモンズに重点を置いて論じてきたが、1.1.2のアクティブラーニングを促進する学習環境としての側面、1.1.3のコミュニケーションスペースの新展開としての側面も、ラーニングコモンズを議論する上では



非常に重要な観点である。今後の議論の中でそれぞれの観点からの知見の関連性をより明確にし、整理することで議論の精度を上げることが必要である。

本ヒアリングでは、得られた知見と同様に、複数のラーニングコモンズに関する部署が連携し、教職員が共に視察を行ったことも意義深かった。学内のラーニングコモンズに関する議論は、少しずつ整理されてきており、関連文献を読み合うことで得られる情報も多くなっているが、やはり学生たちが目の前で学習活動を行っている様子、学習環境に接している様子を自分の目で見ることにまさる情報はない。ラーニングコモンズで学ぶ学生たちの様子を目の当たりにするという共体験を得ることで、ラーニングコモンズに関連する部署のメンバーが暗黙知を共有し、今後の議論の土台を得ることができたという事自体が、本視察の大きな収穫であったといえる。

今後は、本ヒアリングにおいて得られた知見を引き続き整理することは当然のこと、さらにヒアリング対象を拡大し、より広範な情報を収集することを計画している。

#### 謝辞

本調査は、文部科学省「グローバル人材育成推進事業」の助成を受けて実施された。

#### 参考文献

- ドナルド・ビーグル(2008) ラーニング・コモンズの歴史的文脈、名古屋大学附属図書館研究年報, 7, pp25-34
- 橋本春美(2012) 基調報告 ポスト『マイライフ・マイライブラリー』—学習滞在型図書館における学習・教育支援の可能性—, 平成24年度 第98回 全国図書館大会島根大会要綱, pp40-41
- 林一雅, 望月俊男, 西森年寿, 河西由美子, 椿本弥生, 柳澤要 (2010) 学びの空間が大学を変える—ラーニングスタジオ・ラーニングコモンズ・コミュニケーションスペースの展開—, 山内祐平(編著), ボイックス株式会社, 東京
- 小林一章(2009) マイライフ・マイライブラリー, IDE現代の高等教育, 5月号, pp32-37
- 永田治樹(2008) 大学図書館における新しい「場」インフォメーション・コモンズとラーニング・コモンズ, 名古屋大学附属図書館研究年報, 7, pp3-14
- 東京女子大学(2010)「マイライフ・マイライブラリー」実績報告書(2007—2010年度), [http://library.twcu.ac.jp/sogo/gp\\_report.htm](http://library.twcu.ac.jp/sogo/gp_report.htm), (2013/02/13閲覧)
- 上田直人・長谷川豊祐(2008) わが国の大学図書館におけるラーニング・コモンズ事例研究, 名古屋大学附属図書館研究年報,

7, pp47-62

米澤誠(2006) インフォメーション・コモンズからラーニング・コモンズへ:大学図書館におけるネット世代の学習支援, カレントアウェアネス, no. 289, pp9-12.

米澤誠(2008) ラーニングコモンズの本質:ICT時代における情報リテラシー／オープン教育を実現する基盤施設としての図書館, 名古屋大学附属図書館研究年報, 7, pp35-46

KEYWORDS: Learning environment, Learning commons, Active learning, Communication space

2012年11月30日受理

†Masae NAKAZAWA \*, Hideaki KODAMA \*, Keiko IKEDA \*\*, Miyako OGURA\*\*\*, Hiroshi SHINOZAKI\*\*\*, Miyuko IMAI\*\*, Megumi FUJIWARA\*: A Hearing Report for Building the KSU's Learning Commons

\*Center of Presidential Affairs, Kyoto Sangyo University, Motoyama, Kamigamo, Kitaku, Kyoto, Japan 603-8555

\*\*Library, Kyoto Sangyo University, Motoyama, Kamigamo, Kitaku, Kyoto, Japan 603-8555

\*\*\*Administration Department, Kyoto Sangyo University, Motoyama, Kamigamo, Kitaku, Kyoto, Japan 603-8555